

使われなくなった
のこぎり屋根工場
今後を語る座談会

第三回

報告書

のこぎり座

座談会内容

『のこぎり屋根建築講座』

講師：浅野昭一

日時、平成二十九年二月十二日

午後三時～五時

場所、平松毛織株式会社工場

一宮市籠屋四丁目十一番三号

第三回のコ座 『のこぎり屋根建築講座』

目的：

- ・ 繊維のまちの歴史として、のこぎり屋根建築の工法を認識し、伝承していくこと。
- ・ 別の視点からのこぎり屋根工場をとらえ、利用する上で新たな楽しみを生み出すこと。
- ・ のこぎり屋根建築の補修や改修がより合理的に行えるようにすること。

配布資料：浅野棟梁による断面図、梁伏図、仕用表（仕様表）、のこぎり屋根工場についての作文

事前質疑：

- ・ 浅野棟梁の手掛けられた物件の棟数・規模・残存物件
- ・ 建築方法・のこぎり部分トラスの種類
- ・ ノコギリ屋根工場がどのように量産されていったのか
- ・ 尾州オリジナルの工夫やスタイルがあったのか

今回の座談会は、実際にのこぎり屋根工場を建築されていた棟梁の浅野さんをお招きしました。最初に浅野さんに当時のお話を伺いました。



私は十八歳で大工になりました。空襲によって焼け野原になり家がないので、大工にでもなろうというのがきっかけです。二十八歳で独立しましたが、最初は仕事がないので、材木屋の下請の仕事をしていました。それがのこぎり屋根工場建築でした。最初は何もわからず先輩大工に習いながら建てました。実はのこぎり屋根工場は難しくない。型板をつかってそれに合わせて建てていくので、それさえあればいくらでも建てられます。約十棟の工場を建てましたが、だいたい二連の小さな工場でした。当時はどんどん仕事があったので、毎日のように朝から晩まで働いて、内装を作っている暇がありませんでした。電動道具は無く、あったのはドリルー丁だけで、ボルトを締めるときのみ使います。それ以外は出彫り、手仕事でした。若い頃は疲れというものを知りませんでした。今となってはとも大工はできません。のこぎり屋根工場は伊勢湾台風の年（昭和34年）まで建てていました。

次に、浅野さんに書いて頂いた図面と、実際の工場の部材とを照らし合わせながら、部材の名前と役割を説明してもらいました。その際、平松毛織工場の特徴が少し見えてきました。

この工場は柱の間隔が広く、長さ六間もある大きな大台を使っています。また、母屋の上に垂木を流すことなく、その分、厚い野地板を使っています。詳しい理由はわかりませんが、工場によって、大工さんによって少しずつ違いがあることを再認識しました。工場の中央には少し傾いている独立柱があります。これは向かいの起街道にバスが通るようになり大きな振動が地面から工場に伝わり、全体がだんだんと歪んでいったそうです。道路が舗装されてからは振動が減り、今の形を保っています。



浅野さんが材木について以下のように補足してくれました。

材木には官材と民材とがあります。国が管理している官材は歪みや節が少なく、扱いやすいのが特徴です。民間が管理している民材は癖がありますが、力強い材です。梁などには曲がった材木をそのまま使い、より強度をつけています。

一般的に山の北側は光がやわらかく、癖が少ないものが多いようです。そして材木は一度塩水に浸すことで、害虫を駆除し、材を引き締める効果があります。

ここから参加された方からの質疑に入ります。

・浅野さんが建てた工場はどの辺りにありますか。それらの工場はまだ残っていますか。

近いもので板倉、三条、遠いものは羽島市にあり、当時は濃尾大橋がなかったので笠松から回って現場に行っていました。工場を壊したという連絡は一度ももらっていませんし、ほとんどが小さな工場だったので、例え機屋を辞めても物置か何かに使っているだろうと思います。

・伊勢湾台風の被害はありましたか。

羽島に建てた工場は伊勢湾台風によって工場一軒そのままの形で隣の畑に流されて建っていたらしく、大変驚きました。

・型板は工場によって違うものを使うのですか。

工場によって変えることはありません。梁から下は土地の形状によって変わるところはありますが、梁から上は全て同じです。ほとんどの工場が北向きの天窓でしたが、一軒だけ南向きの天窓の工場を建てました。それでも型板をひっくり返せばいいので、何てことはありませんでしたが、驚きました。建て主から南向きにしたいという要望があったのですが、理由は知りません。大工がそこまで質問はできませんでした。

・型板は現場で作っていたのですか。型板や材木はどうやって運んだのですか。

現場では作っていません。予め作ったものを現場に持っていきます。型板は二分三（7ミリ程度）の薄い材なので持ち運びは苦ではありませんでした。当時はトラックが無かったので、材木は馬車で運んでいました。木曾川堤防への上り坂を、馬を叩きながら上がっていくのは可哀想でした。

・東西の壁には窓は作らないのですか。

東西の窓は朝夕の直射日光が入りやすいので、殆ど作りません。出入り口をつくる程度です。北側の天窓は透明ガラスを使いましたが、南側の壁にある窓は磨りガラスを使い、直射日光が入らないようにしました。



- ・ 登梁の角度、柱の長さ、陸梁の高さは決まっていますか。土台はどうゆう造りですか。

一般的には四寸勾配です。あるとしても五寸五分までで、四寸未満はありません。屋根の水はけがよければそうできたかもしれませんが、勾配を緩くすれば天窓が小さくなります。柱の長さもだいたい十三尺程度と決まっています。中に入る織機の高さによって決まったのではないのでしょうか。

外壁下はコンクリート布基礎、独立柱下はコンクリート独立基礎です。基礎の下は栗石を敷きます。

- ・ 構造材には松が使われていますが、松やにははめますか。

松やには出ますが、問題はありませんので放っておきます。松やにのせいで道具がだめになることがあるので、それは注意が必要です。

- ・ 工期はどれぐらいですか。現場は何人で働いていましたか。
- ・ のこぎり屋根建築特有の技術はありますか。のこぎり屋根工場は増築しやすい建築ですか。

工事は半月はかかります。現場は基本一人で、組上げの時は鳶職を使っていました。のこぎり屋根は他の建築に比べて簡単な造りなので、特別な技術は必要ありません。同じことの繰り返しなので増築しやすい建築です。梁をひじきの上で接いでいきます。

- ・陸梁と頬杖の間に入る構造材「ひじき」とはどのような意味ですか。

肘を張っている格好に似ていることから「ひじき」と呼ばれます。接いである梁を固定するための重要な部材です。よって、ひじきは一本の通し材であり、それ自体を接ぎ合わせることはありません。

- ・のこぎり屋根工場はいくらで建てられますか。

当時は田んぼ一反売れば、約36坪（6間×6間）の工場と織機、準備機等一式が揃ったそうです。

- ・工場の寒さ暑さ対策を工夫することはあったのですか。

そのような工夫はしていません。

この際、工場で働いていた方からご意見がでました。

寒いときは練炭を焚いていた。織機も熱を発するから、工場内でも場所によって気温が異なっていた。糸粉が舞うので火を使うと火事になりやすかった。暑い時は換気扇を使って換気をする。織機を動かすベルトがずっと回っているので、それによっても工場内の空気が流れていた。

- ・浅野さんはなぜ一般的な「建前」ではなく「建舞」と書くのですか。

建て主さんから、棟梁だから祭祀の場を盛り上げるために、歌や舞をしてほしいと頼まれました。そのときの印象が強いのでしょう。私は舞はできませんので、道中伊勢音頭を唄いました。

大工は「大苦」と書くとされる程、建舞までは大変でした。今までやってきたことの集大成が建舞でした。間違いがあれば大変なので、建舞の前夜は眠れませんでした。

会の終わりに浅野さんに道中伊勢音頭を唄って頂くことになりましたが、「イナー！」と唄い始めたとたん忘れてしまったそうです。

最後に、一宮ケーブルテレビ ICC の浅井さんが撮られた座談会後のインタビューの一部をご紹介します。座談会の模様は、朝のニュースで流れるそうです。

インタビュー①

- ・今回座談会に参加してみて如何でしたか。

のこぎり屋根工場の構造を学ぶ機会はなかなかないので勉強になりました。

- ・最近、のこぎり屋根など地元の産業や文化を残していこうという動きが出ていますが、それについてどう感じますか。

地元資源の再発掘、改めてこの土地の良さを学べる機会になっていて、良いことだと思います。



インタビュー②

- ・今日はどちらからいらっしゃいましたか。

横浜からです。産業遺産に興味があり、のこぎり屋根の繊維工場が一宮に多くあるということで、見学したいと思いました。

- ・今回座談会に参加してみて如何でしたか。

棟梁の話はとても参考になりました。住宅と違って、ほとんど構造だけでできている工場の中身が見えたので面白かったです。

- ・近代建築や産業遺産を保存・活用していこうという動きについてどう感じますか。

私も大学での研究を通してそうゆう動きを活発化させていく力になりたいと思っています。

- ・実際に一宮ののこぎり屋根工場に入ってみて如何でしたか。

北側の窓から入ってくるやわらかい自然の光によって、間接照明しか使っていない空間でも十分明るいなと感じました。

おわりに

浅野さんとは今年の一月に初めてお会いしました。いつも縁側で書き物や読書をしていらっしゃる浅野さんを何度か訪ねました。いつもそのまま縁側に上がらせてもらい、一時間ぐらい話をします。当時の話、今の話、昔の話、いろいろな話を伺いました。浅野さんは現在自叙伝を書かれています。もう四冊目だそうです。今回の座談会もそこに書き加えられることを楽しみにしています。忘れてしまわれた道中伊勢音頭も思い出されたときには唄って頂けたらと思います。

浅野さんはもうすぐ90歳になるそうですがまだまだお元気で、座談会のために貴重な資料を用意して頂きました。最後に浅野さんの作文を転記し、今回の報告書は終わりたいと思います。

浅野さん、皆様、寒い中ご苦労様でした。ありがとうございます。

第四回のご座は、箆屋八幡社の隣の工場を掃除し、今後の使い方について皆さんで話し合います。日程は四月末あるいは五月初めの予定です。よろしくお願い致します。

平松毛織株式会社取締役 平松久典

私が大工棟梁の家に弟子入りしたのは十八歳の春四月でした。それから三年間親方の元で修行致しました。親方が三年経った四月に一応年明けの祝ひをしてやるからと云う事で机一ツ鋸一丁を年明けの祝ひに頂いて親方の元を去りました。その後伯父さんが離れを建ててくれと云われましたが親方の下ではほとんど自分で家を建てたことが無かったのでまったの話。困りましたが男は度胸とばかりに引き受けました。がそれからが大変でした。仕事から帰ってうちのはなれの構造を見てはそれを参考にして造り。さて建舞の前夜は心配でほとんど眠れませんでした。建舞の当日は如何にでもなれと云う気分をかへって前夜よりは楽でした。さらに一ヶ所の間違ひもなく夕方迄には立派に建て終わりました。あの時の嬉しさは生涯忘れる事はありません。

二十七歳の秋に結婚し。二十八歳で独立致しました。独立しても若造にすぐ仕事に来るわけではありませんので。三条の丸三製材で下請の仕事の頂いて働きました。昭和二十九年の事です。時はまさにガチャマンの全盛期でしたので。下請の仕事も必然的に工場建築が多くなりました。最初は先輩大工さんに工場の造り方を教はり乍ら二連の工場を建てました。此れが私の大工としての工場建築の第一歩でした。その後は丸三の社長に気に入られて。明けても暮れても工場を刻んで建て刻んでは建てして。内部の造作は材木屋の先輩大工におまかせ致しました。思ひ出すのはあまりの忙しさに夜は十一時頃迄仕事をし。夕食は女房に材木屋迄持ってこさせて食事後は休む間も無くすぐに仕事を致しました。私も若かったので当時は殆ど疲れと云うものを知りませんでした。

その後丸三製材で建てた工場は殆ど二連の工場。約八棟程だと思ひます。

自分自身で請負って建てた工場は二連ののこぎり屋根で。わずか二棟だけだと記憶しております。

浅野昭一